

孔子はよき人

——本居宣長の孔子観とその周辺——

河合一樹

序

「聖人と人はいへとも聖人のたくひならめや孔子はよき人
『石上稿』、一五・五〇〇」という歌があるように、本居宣
長は儒教を否定しながら孔子を高く評価した。このことはそ
の思想を考える上で重要な意味を持つているものと思われ
る。そのような認識から、かつて拙稿において主にその評価
の理由を考究して、「正名」論との関係を指摘した¹⁾。そして、
六経を編纂した学者としての孔子への共感が極めて高い孔子
評価の背景に存していると考えた。

そのこと自体については現在でも見解に変化はないが、そ
の際には十分に論じ切れなかった点が残されている。という
のも、評価の理由を明らかにすることを目指して「正名」論
を巡る議論に力を用いた為に、孔子評価自体についての検討
が簡略なものになったからである。宣長の孔子観はその思想

形成において一貫したものであったのか、あるいはそれは同
時代の思想家たちの中にどのように位置づけることが出来る
のかといった問題には更に考究すべき余地がある。本稿で
は、後者の課題に取り組み、宣長と他の国学者や儒者の孔子
観を比較することを通して旧稿の議論を補強したい。

本稿の大部分は国学者間での比較に費やされる。他の国学
者との比較が必要であるのは、もし宣長の孔子観が国学者た
ちの間で広く共有されたものと同じであるとすれば、それを
宣長の思想の特徴として扱うことができなくなるからであ
る。その点を考慮して旧稿でも賀茂真淵との相違に簡単に触
れたが、本稿ではさらに鈴木胤²⁾・村田春海³⁾・平田篤胤につい
ても取り上げたい。もとよりこれらの人物について論じるだ
けでは、国学者全体を見渡したということとは出来ないだろ
う。しかしながら、それぞれの人物が異なった孔子観を有し
ているということが確認出来たならば、十分に宣長の独自性
を示すことになると思われる。

儒者との関係については、わずかに宣長に大きな影響を与えた荻生徂徠と徂徠の背景となつた伊藤仁斎のみを扱いたい。もちろん、孔子がどのような存在であるかということは儒教の長い歴史の中で早くから問題となつて来た事柄であり、江戸時代の儒者の言説も多様であるが、それらの全体を概括することは本稿の限界を超えた課題である。また、徂徠の孔子観は江戸時代の思想史に大きな衝撃を与えたものであり、宣長への影響も比較的確に見て取れる。その為、その点のみを簡単に指摘しておくことにしたい。

一 宣長と真淵の孔子観

行論の都合上、旧稿でも論じたことではあるが、宣長の孔子観と真淵との相違について簡単に見ておきたい。宣長の孔子観を端的に示すのは、『玉勝間』三の巻の初版本における「儒者孔子を尊むこと過て周公を尊むこと足ずといふ論ひ」と「周公旦孔丘孟軻」という連続した二つの条である。前者には次のようにある。

ある人のいひけるは。よゝの儒者の孔子を尊むことは。あまりに過て。周公を尊むことのたらざるは。心得ぬこと也。周公こそ。かの国の道は。全く作りそなへたれ。

孔子はたゞ。そのくずれて。絶むとせしを。とりなほして。世にのこし伝えたるのみこそあれ。かの周公のいさをにくらぶれば。何ばかりのわざにもあらざる物を。といへるは。まことにさること也。

〔杉戸清彬編『初版本 玉がつま三の巻』、和泉書院、二〇〇三年、七五頁。〕

宣長はある人の言葉として、周公こそ「かの国の道」を作つたのであり、孔子はそれを伝えただけなのだから、世の中の儒者の周公への尊敬は足りず、孔子への尊敬は過剰であるということを紹介し、それに同意している。

そして、後者の「周公旦孔丘孟軻」においては次のような記述が注目される。

又周公旦は。いとわろき人にて。〔中略〕然るに孔丘は。其道を伝へながら。いとよき人にて。もろこしの国には。たぐひすくなく。まことの道の意にも。おのづからかなひて。直き人になん有ける。又孟軻といひけるをのこは。同じさまに孔丘が伝へし道をいひたてながら。孔丘が心とは。雪と墨とかいふらんやうに。したの心うらうへにて。たぐひもなくわろき人にこそ有けれ。

〔杉戸清彬編『初版本 玉がつま三の巻』、

ここでは、宣長の立場からの周公、孔子、孟子への評価が示されている。すなわち、周公を「いとわるき人」、孟子を「たぐひもなくわるき人」と非難する中であって、孔子のみは「いとよき人」として賛美にも近い評価を与えられている。

以上のように宣長の孔子観の特徴は、第一にあくまで周公の作つた道を伝えた人物であると規定する点と、第二にそれに基づいて周公や孟子と切り離して孔子を評価するという点にある。

旧稿では、ここから特に第一の特徴に注目して、孔子が「正名」という理念の下に六経を編纂し道を伝えたことに対する宣長の評価を考察したが、以下ではむしろ第二の特徴について掘り下げて他の思想家と見比べていきたい。

宣長の師である賀茂真淵については、旧稿でも『国意考』の一文を引いて、儒学を厳しく非難する点で宣長と共通するものの、儒学と孔子を切り離して孔子だけを高く評価するといった態度は見られないことを指摘した。ここでは旧稿では引用しなかったより明確にその点を裏付ける書簡の記述を引用しておきたい。

堯を舜がうはひ、禹は舜をうはひ、文王はちうを奪はん志をなし、終に武王かうはひし事明なるを、孔子といふ山人の文・武を本尊として、人をたませしをうけて皆聖人といふ也、

〔賀茂真淵「斎藤信幸宛書簡」(『賀茂真淵全集』第二十三巻)所収、一五五頁〕

中国の王朝交代は、結局のところ篡奪の歴史であるにもかかわらず、文王・武王を褒め称えて人を騙したのが孔子であると言う。これは明確に孔子を非難するものであるといつてよいだろう。真淵には孔子だけを特別視する思想は見取れない。

なお、こうした真淵の孔子批判に答えるかのような宣長の発言がある。『玉勝間』の第九六六条である。

論語の中にも、堯舜禹泰伯文王をいみしくほめたれども、湯王武王をほめたる事は一言もなし、意あるにや、終りに、湯王が言をあげたるは、孔丘の意にはあらず、

〔『玉勝間』一・四三四〕

宣長は孔子に革命を起こした湯王や武王を肯定する意図はなかつたとしている。そうであれば、真淵の批判は当たらな

いということになるだろう。真淵と宣長の師弟はその孔子に對する評価において異なつた立場に立つている。

二 鈴木胤と村田春海の儒教観

「孔子はよき人」の歌は、もともと寛政四年に鈴木胤に送られたものである。そして、それは胤が宣長に送つた「送本居先生序」の次のような記述に応答するものであつた。

其の書を著し言を立つるを見るに、務めて辭令に順ひ、名分を正し、上下を定め、内外を辨じ、私智を祛け、淳厚を尚び、古道を明め、頽風を挽し、上神の至徳を闡揚し、以て當世の大弊を救ふに有り。吾竊に先生の風、頗る仲尼に似たる有りて、其の學正に居り宗を得て、百世に標準たるべきを悦ぶ。先生に見るに及び、其の談論を聞くに、其の漢人におけるや、獨り仲尼と、また其の志同じき所有者を以ての故也。

〔鈴木胤『離屋集初篇』(愛知教育大学付属図書館蔵)、

一七葉裏—一八葉表〕

ここで胤は、宣長を賞賛し孔子と「其の志同じき所有者」としてゐる。宣長はそれを宜うように「孔子はよき人」の歌

を詠んだ訳である。なお、胤が宣長を褒める際に「名分を正し、上下を定め」と言つてゐることは宣長の孔子観が「正名」と繋がつてゐることの根柢の一つともなるが、本稿では深く立ち入らない。

このようなやり取りを見ると、宣長と胤は孔子がどのような存在であるかということについて通じ合つてゐるに思える。少なくとも、両者の間に一定の共通理解があつたことは確かであろう。しかしながら、胤の孔子観が宣長と全く同一のものであつたとは言えない。というのも、胤は儒学を否定しないからである。

そもそも、胤は宣長の弟子であり『活語斷続譜』や『言語四種論』などの日本語研究を残したことから国学者と称されることもあるが、同時に『論語參解』や『大学參解』なども書いており儒者としての色合いが強い。後には、尾張藩の藩儒にもなつた。その為、儒学に對して肯定的な態度を取るのも当然のことと言えるだろう。

そして、より具体的な宣長との相違点として孟子に對する評価の対立が挙げられる。『離屋集初篇』に収められた「論孟子三則」という文章がある。この文章全体が孟子を批判する言説への反論という性格を持つてゐるが、その中でも次のような記述が注目される。

大抵世の物氏を学び、経済を志す者、率ね多く知術を崇び、徳義を外にし、孟子を刺り、宋儒を罵る。是れ豈唯だ孟子を刺り、宋儒を罵るのみならんや。其の経伝載する所、堯舜以下聖賢の格言懿範に於いて、率ね厭棄荒廢して、悦ばず省みず、遂に轍を分けて以て背馳して自らは知らざるなり。

〔鈴木胤「離屋集初篇」(愛知教育大学付属図書館蔵)、五七葉表〕

「世の物氏を学び、経済を志す者」とは、荻生徂徠の弟子であり『経済録』の著者でもある太宰春台であると考えられる。春台には孟子を批判する『孟子論』や『聖学問答』という著作がある。それに対して、胤は孟子や宋儒を非難することとは「堯舜以下聖賢の格言懿範」に背くことに他ならないと強く批判している。

このように、胤は孔子を高く評価する点及びその評価の理由などにおいて宣長と共通点を持っているものの、そもそも儒教を否定せず孟子も肯定的に評価している点で宣長とは異なっていると考えられる。

胤のように儒者としての色彩が強い人物の他にも、儒教を否定しない国学者がいる。それは、江戸派の国学者の代表的な人物の一人である村田春海である。春海は真淵の弟子であ

り、宣長より十六歳年下ではあるがほぼ同世代と言つてよいだろう。また、春海は『時文摘紙』において「正名」を論じており、その点でも宣長と共通している。

春海と和泉真国の論争を最終的に真国が纏めた『明道書』という著作がある。その中の春海の発言に宣長への強い批判がある。

春海云、日本には元より道といふ物なし。本居が、道々といふは、ことごとく杜撰にして、直毘靈ちきりやまなどいへる書は、殊に妄説の甚しき物なり。吾は孔子と釈迦の道をのみこそたふとめ、日本の道は甚いときらひ也

〔和泉真国『明道書』(『日本思想大系 国学運動の思想』所収)、一三二—一三三頁〕

ここで春海は『直毘靈』を批判して、日本には元来道はなく宣長の主張は妄説であると述べる。そして、注目すべきは孔子と釈迦の道をこそ尊んでいっていると云っていることである。さらに次の箇所はより明確に春海の立場を示している。

おのれは儒者にて待るを、彼、古へにあともなきことをいひつりて、それを道也とたて、世をあさむく宣長等がたぐひの学まなびする人とおほしとれるも、たがひ侍れば、其

よしどもいささか、しりへにしるし侍り。是は、わぬしに是を見て思ひさとり玉へとのことにも侍らず。

〔和泉真国『明道書』（『日本思想大系』
国学運動の思想』所収）、一三九頁〕

春海は眼のように儒学関連の業績は残していないが、それでも自らを「儒者」であると規定する。そして、宣長と一緒にはしないで欲しいと述べている。このような考えから、春海は自らの学問観を述べた「和学大概」において、次のように和学を儒者の責務の一つとして位置づけることになる。

我国の儒生は、かならず我国の国史典故に通ぜずして叶はざる事なるを、当世は学問の道草奔にのみあれば、儒者皆曲芸の士の如くになりて、儒者の任はたゞ漢土の書に通ずるを、おのれが業とのみ心得、我国の事は其業の外のものやうにおもひたるは、学問の本意を失へるもの也。林春翁が諸生を教る五科のうち、和学科をたてけるはこゝろある事なり。

〔村田春海『織錦舎随筆』（『日本随筆大成』

第一期 第五卷』所収）、三九四頁〕

宣長が自らの学問はあくまで契沖・真淵から起こったもの

であると強く主張するのに対して、春海は林羅山の三男林鷲峰が林家の塾に和学科を設けたことを持ち出す。この相違は極めて大きいというべきだろう。

以上のように、鈴木眼と村田春海は儒教について肯定的な態度を取っていた。その為、二人が孔子や「正名」について宣長と共通する点を有しているとしても、儒教を否定しながら孔子のみを肯定する宣長との間には埋めがたい差異があると言わなければならない。

三 平田篤胤の孔子観

続いて、平田篤胤にも言及しておきたい。宣長の没後門人を名乗った篤胤は、「孔子はよき人」の歌を自らの著作に引用し、解説すらしている。それにもかかわらず、両者の孔子観は同じではないと思われる。次のような篤胤の解説は、宣長から逸脱し独自の思想を示すものである。

但し右詠歌は。孟軻以来に。聖人々と世に稱へ来り候面々を。其行實の上より見候え。聖人と申す名稱の。實に叶はざるが多く。中には言善く天命に託して世を欺き。其の主君を亡して王位を篡ひ候。逆賊なども數相錯り。彼れ等に同臭の族こそ。其を聖人とも申さぬ。本朝

に於ては、決して規則と致すまじき倫たぐひに候を。舊く眞聖人に混じて。然る輩をも聖人と唱へ来り。村落の蒙士ら。其眞擬の辯別是なく。世に聖人と申来り候をば。一向に信仰雷同やぶ仕り。動すれば代テ天行モツ命ヲなど様の儀を。口實と仕候者も是あるを、一々辯論に及び難く候ゆゑ。孔子は皇朝に於て。王號をも授け賜ひ候。至善の人に候へば。此人一箇を聖學の目當と仕り。其餘はまづ姑く俗稱のまゝに。担任うちまかせて聖人と稱し。然る聖人と一列ひとつらにこそ云へ孔子は彼の天命に託たくせて世を欺あやま。君を弑し國を篡へる。愚聖人の類ならず。好人よきひとなりと稱譽いたし候にて。實は世俗に。聖人の大稱を訛り来り。聖の眞擬を知らざる事を。痛く慷慨いたし候。激言に御座候。

〔平田篤胤『舊事紀疑問』(二)新修 平田篤胤全集 第七卷所収〕 六二八―六三九頁〕

この記述は宣長とその門流は聖人を否定するのかという疑問に対する回答の一部である。篤胤は一見聖人を批判しているかに見える「孔子はよき人」の歌を、その実は聖人自体を否定するものではなく「眞聖人」と「擬聖人」との区別を述べるものであると解釈する。すなわち、「聖人」と「孔子」との対立から「眞聖人」と「擬聖人」の対立を読み解く訳である。こうした読み替えがこの説明を長く複雑なものにして

いると言つてよいだろう。そもそも宣長には「眞聖人」「擬聖人」といった用語はないので、その時点で篤胤の独自性が表れている。加えて篤胤が考える「眞聖人」の内実を見るならば、両者の相違がより明瞭になる。

謂ゆる天地人の三皇は更なり。太昊。神農。黄帝。小昊。顓帝の五帝たち。皆右の孔説に相符ひ。其創業し給ひし事ども。悉く經世の大本。かつ民用を綱紀するに。一日も缺かべからぬ事等にて。民今に至るまで。其の恩頼を蒙り候事ゆゑ。私ども此を尊信仕り候こと。中々世儒の口なかくにのみ。聖人々と唱へて。其眞擬をも知らず。麓潤に相過し候類に候はず。

〔平田篤胤『舊事紀疑問』(二)新修 平田篤胤全集 第七卷所収〕 六四〇頁〕

ここで挙げられているのはいわゆる「三皇五帝」である。篤胤はそれを「眞聖人」と位置付けることによつて、宣長は「擬聖人」を批判しているに過ぎないとする。しかしながら、『玉勝間』三の巻初版本において見たように宣長が強調するのはあくまで、周公と孔子との対立であり、また他の著作においてもとりわけ「三皇五帝」を問題とするような箇所はない。両者の言説は、「孔子はよき人」の歌を介して繋がつて

いながら全く異なったものである。

なお、篤胤の次のような発言も宣長には見られないものである。

とかく諸越人の説く處は。實物の神有て。世の中の諸の事物を造化²²すことを知らぬゆゑ。其の神のさなる、事實の跡を。みな陰陽とのみ申すけれども。夫は非^{ひが}ことである。その陰陽をなす。實物の神あることを知た人は。戒^{かち}の儒者では。孔子ばかりのやうでござる。

〔平田篤胤『志都能石屋講本』(『新修 平田篤胤全集』第十四卷)所収、四二九頁〕

篤胤は中国人が「實物の神」の存在を知らずに「陰陽」の説を唱えていることを批判する。ただし、孔子は中国の儒者で唯一「實物の神」の存在を知っていた人物であるとされる。このような見解は孔子のみを高く評価する理由としては極めて明確であるが、宣長には存在しない。こうした直接的な発言がないからこそ、宣長の孔子観は考究すべき問題となる訳である。篤胤は宣長の「孔子はよき人」の歌を自らの思想に立脚して読み解き、その結果として宣長とは異なった孔子観に到ったというべきだろう。

以上において、簡潔にはあるが真淵・眼・春海・篤胤の

孔子観を宣長と見比べて来た。そのことによつてこれらの人物の孔子観が全て宣長とは異なるものであり、またそれぞれの間にも差異があることが明らかになつたものと思う。

四 徂徠派からの影響

これまでの国学者に対する検討とは多少話題が変わるが、宣長の孔子観の同時代の思想史との関わりという観点からは、そこに徂徠派からの影響が見て取れるということも重要である。もちろん、このことは徂徠と宣長の孔子観が全面的に一致するということを意味する訳ではなく、儒者徂徠と儒学を非難する宣長との距離は大きいと言わざるを得ない。しかしながら、それにもかかわらず『玉勝間』三の巻初版本における宣長の記述は徂徠の孔子観を批判的に継承するものであると考えられる。

徂徠の孔子観について見て行く上で、まず徂徠が強く意識していた伊藤仁斎に触れておきたい⁽¹⁰⁾。ともに朱子学を強く批判して独自の儒学を打ち立てた両者であるが、その孔子観を巡る思索には大きな相違がある。仁斎の立場を明瞭に示すものとして次のような発言がある。

蓋し知り難く行い難く高遠及ぶべからざるの説は、乃ち

異端邪説にして、知り易く行い易く平正親切なる者は、便ち是堯舜の道にして、孔子立教の本原、論語の宗旨なり。昔在孔子旁く古今を觀、群聖を歴遷し、特に堯舜を祖述し、文武を憲章し、盡く夫の知り難く行い難く、磅礴廣大窺い測るべからざるの説を黜けて、其の知り易く行い易く萬世不易の道を立てて、以て生民の極と為、之を門人に傳え、之を後世に詔ぐ。故に論語の一書、實に最上至極宇宙第一の書と為て、孔子の聖、生民以来未だ嘗て有らずして、堯舜に賢れること遠しと為る所以の者は、此を以てなり。而して孟子の書、又論語に亞いで孔子の旨を發明する者なり。

〔伊藤仁齋『童子問』（『日本古典文学大系』近世思想家文集）所収、五七〜五八頁〕

『論語』を「最上至極宇宙第一の書」とする有名な言葉を含む一文である。仁齋は朱子学などの後儒の説を「知り難く行い難い高遠及ぶべからざる」ものとして退けつつ、孔子を言葉を尽くして称賛する。そして、『孟子』を「論語に亞いで孔子の旨を發明する者」と位置付け、この二者に立ち返ることを求めている。その立場から仁齋は『論語古義』『孟子古義』『語字並字義』といった著作を著すことになる。そして、この『論語』を重視する態度がもたらす帰結も見逃してはな

らない。

従前の學者、皆論語を以て、徒らに孔門一時問答の語と為て、其高く六經の上に出づることを知らず。道の天下後世に明らかならず行われざる所以の者は、職として此の由しなり。學者審らかにせざんばあるべからず。

〔伊藤仁齋『童子問』（『日本古典文学大系』近世思想家文集）所収、五八頁〕

『論語』は單なる孔子と弟子との一時の問答の記録ではない。それは「高く六經の上に出づる」ものである。このことを知らないから道は明らかにならないのだと言っている。このように仁齋は、六經よりも『論語』が重要であるとし、また『論語』の意味を詳らかにするものとして『孟子』をも重視した。

徂徠の学問は如上の仁齋の立場を乗り越えようとする中で成立することになる。その眼目は、広く知られる通り六經を中心とした「先王の道」の称揚にあるだろう。そして、その観点から孔子については次のような発言が為される。

孔子は、われ敢へてこれを聖人と謂はざるなり。また敢へて聖人に非ずと謂はざるなり。何となれば則ちわが知

は以て聖人を知るに足らざればなり。しかも傲然としてわが一人の見を以てこれを定めて、これを聖人と謂はば、あに僭に非ずや。然りといへども、われ私竊かに以てえらく疑ふらくは必ず聖人ならんと。何となれば、二帝三皇の道は、孔子に由りて墜ちず。

〔荻生徂徠「護園七筆」〕〔荻生徂徠全集 第十七卷〕
みず書房、一九七六年所収）七七三―七七四頁〕

徂徠は孔子が聖人であるかどうか曖昧な立場を取り、自分が決定するのは僭越であるとす。最終的には留保を付けながらも聖人であると述べているものの、その態度は仁斎とは大きく異なっている。もちろん、この記述には文飾的な面もあり、徂徠が孔子が聖人ではないと判断する可能性があったとは考えにくい。しかしながら、そこに疑問が提示されたというだけでも決して小さくはない意義を有しているだろう。こうした疑念が生じるのは、聖人を基本的には実際に世を治め制度を設計した「先王」であると解するからである。政治に関わることのなかった孔子は他の聖人とは違い「二帝三皇の道」を守った功績によって聖人と評価される。

そして、孔子と孟子の関係についても徂徠は重要な見解を示している。

道は知り難く、また言ひ難し。その大なるがための故なり。後世の儒者は、おのおの見る所を道とす。みな一端なり。それ道は、先王の道なり、思・孟よりしてのち、降りて儒家者流となり、すなはち始めて百家と衡を争ふ。みづから小にすと謂ふべきのみ。

〔荻生徂徠「弁道」〕〔日本思想大系 荻生徂徠〕所収〕十頁〕

ここでは子思や孟子以降の後世の儒者は自分自身の見解を「道」であるとして、諸子百家と論争をし、「先王の道」を矮小化した存在として捉えている。すなわち「先王の道」を正しく伝えた孔子と歪めたそれ以降の儒者という構図を徂徠は描いている。このような「先王の道」を中心においた孔子と孟子との理解は、徂徠学が自らの独自性を確立する根拠となった。後に太宰春台はその学統を次のように描いている。

問曰。程子・朱子ヨリ、孟子ヲ大賢ト称シ、又ハ命世聖人ナリトイフ。其説昭昭トシテ明ナリ。日本ニテ、近時京都ノ伊藤仁斎モ、宋儒ヲバ撃タレドモ、孟子ヲ尊信スルコトハ甚シクシテ、孔子ト並ベテ孔孟ト称シ、其書ヲバ論語ト並ベテ、論孟・語孟ト称スルコト、宋儒ト異ナ

ルコト無シ。唐ノ韓退之ハ、一代ノ豪傑ナリシモ、孟子ヲ推尊シテ、「功不_レ在_二禹下_一」ト云リ。然ルニ荻生先生一人孟子ヲ誦テ、孔子ノ道ト合ハズトイフ。吾子孟子論ヲ作テ、孟子ヲ誦ルコト甚シ。願ハクハ其説ノ詳ナルコトヲ聞ン。

〔太宰春台『聖学問答』（『日本思想大系

徂徠学派』所収）、六一頁〕

『聖学問答』は主として孟子批判を目的とした書であり、引用はその本文の冒頭部である。春台は程子・朱子が孟子を「大賢」や「命世亜聖」とし、宋儒を批判した仁斎も孟子を尊信しているが、徂徠一人が批判しているとしている。問答体の「問曰」の部分ではあるが、春台の意見と一致するものであると言つてよいだろう。なお、先に見た服の反論もこうした孟子観に対するものであった。

宣長は『玉勝間』三の巻初版本の二条において、孔子はあくまで道を伝えた人物であること、また孔子と孟子は大きく異なっていることを主張していた。そのような見解の背景に若い頃の宣長の眼前に広がっていた徂徠派の如上のような言説の影響が存していたことは間違いないだろう。

結

以上本稿においては、第一に宣長の孔子観を他の国学者と見比べそれぞれの相違を指摘し、第二に宣長の孔子観に対する徂徠の影響を確認した。特に多くの分量を割いた国学者の孔子観について改めて纏めておこう。真淵は宣長と儒学を強く非難する点で共通しているものの、孔子についても同様に批判していた。服と春海は孔子評価や「正名」に言及する点で宣長と共通点を持つが、儒学全体を肯定的に捉えている点で異なっていた。そして、篤胤は宣長の「孔子はよき人」の歌を引用し、宣長の孔子観を敷衍し説明しているような体裁を取りながら、実際には「真聖人」と「擬聖人」の区別を導入するなど独自の思想によつて宣長とは異なつた主張に到つていた。

序でも述べたように、本稿は旧稿を補うものであり、また宣長の孔子観がその思想において持つ意味をより深く考えるために不可欠ともなる同時代の思想史との比較の作業を纏めたものである。その為、ひたすら宣長と他の思想家との間の異同を列挙する形となり、雑然とした印象を与えてしまうかもしれない。しかしながら、より発展的な議論の前提となるものとして、宣長の孔子観の独自性と重要性またその思想史における位置づけを一定の程度において示し得たものと考え

る。そのことに満足してここに稿を閉じたい。

※宣長からの引用に際しては、筑摩書房版の全集を用い書名の後に「巻数・頁数」の形で当該箇所を示した。

※漢文からの引用は書き下しにし、原文は省略した。

※本稿は二〇一九年度に筑波大学に提出した博士論文『本居宣長研究―大和心と正名』の第二章の一部を論文として再構成し、増補・訂正を加えたものである。

註

(1) 河合一樹「本居宣長の孔子観と「正名」―『玉勝間』第九三条を中心として」(『哲学・思想論叢』第三十五号、筑波大学哲学・思想学会、二〇一七年所収)。以下旧稿と呼ぶ。

(2) 後に言及するように、眼は宣長の門下ではあるものの儒者としての色彩が強いが、本稿では眼が儒者であるか国学者であるかということには立ち入らない。いずれにせよ、少なくとも宣長と一定の繋がりを持った人物であることは動かない。

(3) 旧稿及び本稿で言及した「孔子はよき人」の歌・『玉勝間』三の巻初版本・『玉勝間』第九三条は全て宣長が六十代の頃に書かれたものであるが、宣長の孔子に対する言及自体は、まだ二十代の京都遊学時代の書簡からすでに散見される。そして、若年時と晩年の間では孔子評価に多少の差異があるように見受けられる。その為、それらをどのように総合的に解釈するかという課題がある。筆者としてはそれらを踏まえた上でも『玉勝間』三の巻初版本などにおける孔子観を宣長の定見であるとしてよいと考えるが、その点

についての詳細な議論は、さらに別稿に譲りたい。

(4) 『玉勝間』三の巻の初版本には、現行のものとは異なった箇所があり、この二条は書き換えられている。その事情については、杉戸清彬編『玉がつま 三の巻 初版本』、和泉書院、二〇〇三参照。

(5) 『寛政四年名古屋行日記』、十六五〇三。

(6) 『送本居先生序』について論じたものとしては、尾崎知光「送本居先生序」について、『文莫』第十五号、一九九〇年や飯田隆「宣長学論究」、おうふう、二〇〇八年などがある。

(7) 眼の孟子観を論じたものとして、鶴飼尚代「鈴木眼の孟子論」『中国研究集刊』第十八号、一九九六年がある。

(8) 村田春海の学問観等については、田中康二「村田春海の研究」、汲古書院、二〇〇〇年に詳しい。

(9) 篤胤の孔子観については、中川和明「平田篤胤の孔子観」(『神道宗教』第一六三号、神道宗教学会編、一九九六年所収)や松浦光修「国学者の孔子観―宣長・篤胤を中心として」(『神道史研究』第五二巻第二号、神道史学会編、二〇〇四年所収)などがある。

(10) 仁斎と徂徠の孔子観を比較した考察としては子安宣邦「事件」としての徂徠学」、青土社、一九九〇年がある。

(かわい・かずき) 国際日本文化研究センター

共同研究員